

外塚喬歌集

『鳴禽』

(本阿弥書店)

一師の木侯修をはじめもう二度と会えない人々を想う歌が心に残る。長く生きれば人の死や自らの老いと向き合わざるをえない。

あの世とは行くも帰るもままならぬところなりひと夜翠雨ふりつぐ

ひとり歩きしてたましひは夜の更けに

野の花の香をまとひて帰る

消し忘れつけ忘れはた面忘れ老いにもかつてゆく路標

自分より年上の歌人の歌は人生の先達としての示唆を与えてくれる。生き続けることは悩みと苦しみの連続なのだ。

人にだつて年輪はある苦しみの続いた年は少しゆがみて

もちろんこうした重いテーマの歌ばかりではない。連れ合いとの生活を詠んだ心の軽くなる歌もある。

知らぬことまだまだありさうコンビニのクリームパンが好き

歌集名となった『鳴禽』をはじめ「夢後」「イテ」など、初めて見る言葉が多く、

辞書が離せない。日本語の奥深さを教えられる歌集でもある。(人見 江一)

高島裕歌集

『孟蘭盆世界』

(TOY)

学生時代、学生運動に参加した著者らしく政治や歴史を題材とした歌が目立つ一方、母の老いや子の誕生等による心情の変化はこれまでと異なる魅力がある第七歌集。

義和団の時みたいだな、猿のままいぢめる側に入れてもらふのか

売国奴、いな愛国奴みちみて快適な

まま暮れゆく日本

対欧米、対アジアに対する警鐘を鳴らす歌。愛国心からくる信念が表れている。

一方で、次のような家族の歌が目新しい。妻のため車の臭ひ消してゆく。徹底的に消さねばならぬ

小さきひとの足持ち上げて尻を拭く。この喜びはいづこより湧く

どちらも上旬の事実から下旬で家族への愛や喜びが実感となつてにじみ出る。なげない場面の人間らしさに惹かれる。

ふるさとの内を旅ゆく愉しさに棲み遷り来ぬ。ひばり、たかんど

家族詠などと並ぶテーマの一つであるふるさとへの愛。戸破と高道の難読地名の平

仮名表記が効いている。(早川 晃央)

坂井修一著

『世界を読み、歌を詠む』

(ながらみ書房)

世界情勢にふれての時事詠の本かと思いきや、そうではない。古今東西の文学(時にSFや漫画、映画、絵画にも及ぶ)を響きあわせ、そこから浮かび上がる短歌を鑑賞する。

『古事記』と『ギリシア・ローマ神話』の取り合わせから始まり、『新訳聖書』と『カラマーゾフの兄弟』などにどのような

歌がたぐりよせられることか興味深い。

坂井は本棚の前から離れるとふさわしい

酒を取り合わせる。『莊子』と『銀河帝国興亡史』にはスコッチの水割り。想起されるのは馬場あき子の『渾沌の鬱』。レイ・

ブラッドベリの『霧笛』と星新一の『午後の恐竜』には、きりりと冴えていて、抒情味があり、体の奥深くまで届くシャブリ。

黄金の言葉をもつて私の貧しい胸の中に入り、甘く酸っぱく渋く苦く、感覚と観念の渾沌を醸しつつ、宇宙の遊びをやり

つくしてくれ。

豊かな時間を共有すると同時に、こういう

『遊び』に耽るのもよい、と思わせる一冊である。(月下 桜)